

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：柴田奈津美

この課程博士学位請求論文の審査は、(主査) 伊藤たかね、(副査) 楊凱榮、矢田部修一、広瀬友紀 (以上、東京大学大学院総合文化研究科)、佐野哲也 (明治学院大学) の5名によって行われた。公開審査は平成26年11月28日 (金) 12時15分から14時15分まで、18号館コラボレーションルーム3において行なわれた。論文題目はScope Rigidity and Word Order Flexibility (スコープの固定性と語順の自由性) である。以下、審査結果の要旨を報告する。

本博士論文の目的は、スコープ解釈の自由度と語順の自由度について従来指摘されてきた関係性 (語順が自由な言語は逆スコープ解釈が容認されず、語順が固定している言語では逆スコープ解釈が許される) がなぜ成立するのか、レファレンスセットの計算にコストがかかるという考え方を軸にした説明を与えることである。さらに、通言語的に認められているこの一般化に反して、中国語は語順が固定されていながら逆スコープ解釈が許されないことに着目し、その理由を、日中両言語の子供の文法を視野に入れることによって説明しようとしている。具体的には、以下の三つのリサーチクエスションについてそれぞれ一つの章を与えて考察している。

- (1) 語順の自由度と逆スコープ解釈可能性との関係はどのような理由によって生じるのか。
- (2) 中国語は語順が固定されているにもかかわらず逆スコープ解釈が (一部の特殊な構文以外に) 容認されないのはなぜか。
- (3) スコープ解釈についての子供の文法はどのように説明できるか。

まず第1章は、問題設定を明らかにし、次章以降の議論に必要となる概念について説明している。

第2章は(1)の問題を扱っている。派生の経済性という考え方に基づき、語順に変化を起ささない論理形式 (LF) における移動は意味変化を起こす場合にのみ許されるという立場をとることが説明され、さらに本論文の鍵となるレファレンスセット計算の考え方が紹介されている。これらを前提に、この章では、かき混ぜを許す語順自由言語では、基本語順文の逆スコープ解釈と、かき混ぜ文の表層スコープ解釈とが同一の解釈となるため、レファレンスセットの計算によって有標な LF 移動を含まないかきませ文が選択され、逆スコープ解釈は棄却されることになり、先行研究で指摘されている語順の自由度と逆スコープ解釈の可能性との関係に原理的な説明が与えられると論じている。

第3章では、中国語が談話階層言語であること、話題-評言構造を持つ言語であることから、話題化構文が基本語順構文と同じレファレンスセットに含まれると論じ、(2)の問題に

対する答えを提示している。さらに、中国語の中で一部の構文が逆スコープ解釈を許す事実も、話題化構文の可否によって説明できると論じている。

第4章では、子供の文法を扱って(3)の答えを求めている。まず、日本語のスコープ解釈の獲得にかかわる先行研究の結果を統計的に再分析することによって、これらの結果は日本語の子供が逆スコープ解釈を容認するという先行研究の主張を支持するものではなく、チャンスレベルであることを示すと主張している。その上で、子供はレファレンスセット計算が大人と同様にはできないという仮説にたつと、このデータが説明できると述べている。この議論と第3章の議論とを踏まえると、中国語の子供は日本語の子供と同じく逆スコープ解釈に対してチャンスレベルの反応を示すことが予測される。本章後半では、その検証のための実験結果が予測を支持しなかったことを報告し、それが子供の誤った構文解析によるものであると分析している。

最後の第5章では、本研究の内容をまとめた上でその意義を述べ、今後の課題について言及している。

本論文の最大の成果は、事実観察としては先行研究で指摘されていた語順自由度と逆スコープ解釈可否の関係について、レファレンスセット解釈という概念を援用することによって、初めて原理的な説明を与えることに成功した点にある。さらに、中国語はこの関係性の一般化に対する反例に見えるが、日本語や英語との対比における中国語の本質的な特徴から引き出される性質によってこの現象が説明できることを示した点も、中国語研究への新しい貢献として高く評価できる。また、実施された実験は、スコープ解釈にかかわる理論上の問題と中国語の構文の特徴とを精査した上で良く練られた実験デザインであり、言語理論の深い理解に基づく実験研究として優れた成果であると言える。

審査会ではいくつかの問題点も指摘された。中国語のデータについては、時制やアスペクトなど若干の変更を加えることで容認度判断が変化する例も見られ、もう少し広い範囲のデータを考察対象とすべきであることが指摘された。また、レファレンスセット計算の概念以外にも、語用論的な原則や言語処理上の構造負荷などが関連する可能性を検討する必要も示唆された。実験結果の解釈については、統計的に有意差のある「多数」の反応に焦点を当てているが、特に幼児を対象とする実験では「少数」の側の反応の意味するところも検討すべきであるという指摘もあった。しかしながら、これらは本論文の博士論文としての価値を損ねるものではない。また、審査会では、問題点の指摘にとどまらず、今後実験を行うべき検討材料が審査委員から提言され、どのような予測がなされるかの議論が行われるなど、本研究の発展性も示された。

以上の評価から、本審査委員会は柴田氏の提出論文について博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。